

職能団体におけるチーム医療

公益社団法人埼玉県診療放射線技師会
会長 田 中 宏



チーム医療とは、日本大百科全書によると「主治医だけでなく、医療に携わるスタッフがそれぞれの高い専門性を前提に、目的と情報を共有し

業務を分担しつつ連携・補完しあい、患者の状況に対応した医療を提供すること。チーム医療の対象には患者の家族も含まれ、共通の目標に向けてチームカンファレンス（医療チームによる話し合い・検討会）を繰り返し、専門的知識を結集して最良の治療やケアを提供しようとする」と書かれている。

チーム医療という言葉が使われ始めたのは1970年代ごろであり、1990年代後半には医療安全への要請が高まったことから、チーム医療への動きが加速された。チーム医療推進協議会は平成21年に北村善明 日本放射線技師会会長（当時）を代表として設立された。チーム医療という言葉が出現し、今日まで約50年の歳月がすぎた。それでも、医療現場によってはチーム医療の浸透度合いに程度があるようである。

本会では、職能団体によるチーム医療の推進にチャレンジしたいと考えていた。職能団体の役員同士においては、賀詞交歓会や行政が主催する式典などでよく顔を合わせる。しかし、会員同士の交流がなければチーム医療の効果は薄い。そこで比較的交流のある公益社団法人埼玉臨床衛生検査技師会と交流を行った。お互いの職種が、お互いの企画に参加できるというものだ。そしてお互いのホー

ムページにリンクを貼ることで、両会の活動を知ることができる。そうすることによって自施設の病院内で会話が生まれ、会員レベルでの交流に役立つと考えている。

例えば、私たち診療放射線技師が診療において「心電図をせめて緊急的なものだけでも読めたら」「血液データを少しでも読めたら」と思った方は少なくないと思う。また臨床検査技師の方でも「画像が少しでも読めたら」と思う方は少なくないようだ。乳癌検診におけるMMGとUSの併用検診の総合判定では、「US術者検査施行前にMMGを観察した上で行うことが望ましい」とされている。USは診療放射線技師と臨床検査技師ともに、法的に行うことができるが、現実には約9割の術者が臨床検査技師である。故に、臨床検査技師の方々はMMGの読影に大変興味を持っていると聞く。

各医療現場の中では既得権を守ろうとするあまり、スキルミクスが進まないともいわれている。であるならば、職能団体で僅かながらの風穴を開けることができればと考えている。「チーム医療」という言葉が出現し半世紀がたった。一つの制度を作ったり変えたりするのは初めの一石から数十年の歳月が必要であり、その間に二石三石とだれかが投げねば必要があると考えている。その一つになれることを期待している。